



バラのつぼみを撒く女性（5世紀）－古代カルタゴとローマ展より－

チュニジア世界遺産

古代カルタゴとローマ展 ～きらめく地中海文明の至宝～

■ 特別陳列 本阿弥陀光悦の手紙 前田育徳会尊經閣文庫分館

■ 特集展示 琳派の精華 ー巨匠たちの競演ー 第2展示室

■ 特集展示 鴨居玲 ーLOVEー 第3展示室

- 企画展 Topics
- 行事予定
- ミュージアムショップ通信

チュニジア世界遺産

古代カルタゴとローマ展

～きらめく地中海文明の至宝～

主催／北國新聞社、石川県立美術館、東映

第7～9展示室

8月29日(土)～9月20日(日)会期中無休

1F
企画展示室

地中海の宝石―チュニジア。白い街並みからサハラ砂漠まで多彩な顔を持つこの国は、古より積み重なる歴史と民族、そして文化が溶け合い独自の文化を育んできました。

今からおおよそ二八〇〇年前、「海の民」フェニキア人によって現在のチュニジア地中海沿岸の地域に植民都市カルタゴが建設されました。カルタゴは、東西地中海の貿易中継地として栄華を極め、大国として長く覇権を握りました。地中海を巡ってのローマとのポエニ戦争、名将ハンニバルの活躍、そしてその悲劇的な結末は今なお伝説として語り継がれています。

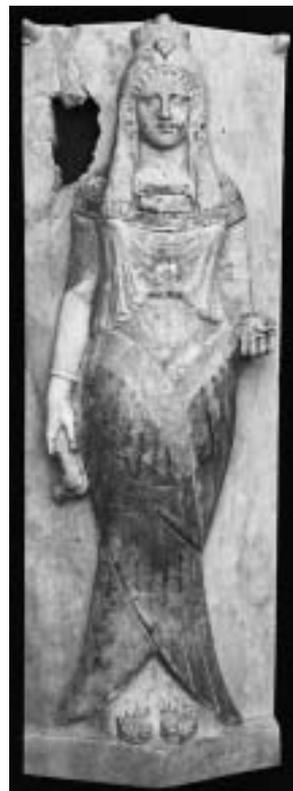
一度はローマによって消滅させられたカルタゴは、それから一〇〇年後ローマ帝国の植民都市としてよみがえり、ローマの要衝都市として再び黄金時代を取り戻します。そして、ローマとカルタゴの文化が融合した優美な文化を築きあげました。ローマ時代のカルタゴで華開いた

芸術・モザイクは、まさにその結晶の一つと言えます。

本展では、カルタゴ遺跡群からの出土品と世界一のモザイクコレクションを誇るチュニジア国立博物館群からの日本初公開作品九割以上を含む一六〇点余りの出品作品を一章「地中海の女王カルタゴ」と二章「ローマに生きるカルタゴ」の二つのテーマで構成し、ギリシア、ローマ、カルタゴによって繰り広げられた地中海世界の壮大なドラマを紹介します。

◇入場料

一般：一二〇〇円（九〇〇円）
中学生：八〇〇円（五〇〇円）
小学生：六〇〇円（三〇〇円）
（一）内は二十名以上の団体料金



有翼女性神官の石棺（紀元前3世紀）



鏡（紀元前3～2世紀）



イヤリング（ポエニ時代）



ヴィーナス像頭部（2～3世紀）

学芸員の眼

本阿弥光悦書状

第2展示室で開催する「琳派の精華」に合わせ、前田育徳会が所蔵する本阿弥光悦の手紙を十年ぶりに公開します。

桃山時代から江戸時代初めにかけて活躍した偉大な芸術家として知られる本阿弥光悦（一五八〇～一六三七）は、加賀藩と深い結びつきがあります。光悦の父光二は、室町時代以来続く刀剣の目利（めきき）や磨礪（とぎ）・浄拭（ぬぐい）を家業とする京都の名門町衆、本阿弥家宗家の七代光心の養子となり、後に別家を立てて、加賀藩の御用を務めます。その後、光悦・光瑳・光甫（空中）まで、藩の用命を受けています。光悦は、加賀藩祖前田利家や二代利長、三代利常、その他多くの重臣たちと親交を重ね、加賀にも数度下向しています。それは父光二の意を受け、天正十二年（一五八四）、あるいは十三年、光悦二十七・八歳頃に利家に刀剣を届けに金沢に来訪しております。

本阿弥家の家業は刀の目利・磨礪・浄拭ですが、光悦の家業との関わりは、家の職人たちへの取り次ぎ的な立場のようです。今日私たちが光悦といえは、書、陶芸、蒔絵、さらには絵画などに優れた芸術家として捉えています。今回展示する手紙にも刀に関するものは一通のみで、茶事に関するものが最も多く、次に謡や謡本、さらには香といった内容がほとんどであり、そこには数寄者光悦の姿が彷彿とします。当初は刀という媒体によるつながりではありましたが、三代利常に象徴されるように、文化政策に藩の存在意義を懸けた加賀藩にとって、京都の洗練された文化人たちとの交流における、光悦の存在の重要性を再認識いただく機会となれば幸いです。

本展は近衛信尹や松花堂昭乗とともに寛永の三筆に数えられる「能書たりし」光悦が、加賀藩の重臣今枝氏に宛てた二十三通の手紙を一室に展示します。「今内様（今枝内記）」宛二十二通とその養嗣子「今民様（今枝民部）」宛一通が巻子装にまとめられています。今枝重直（内記と称す・一五五四～一六二七）は謡曲や和歌、茶の湯を深く嗜んでおり、この手紙もそうした交友を示す慶長期のもので、その内容は謡や茶の湯に関するものが多くを占め、両者の数寄者としての親交の深さをうかがい知ることができません。

こうした手紙にはその筆者の心情や人柄が吐露されていることが魅力です。人間光悦を偲んでいただくとともに、光悦の筆跡を味わっていただき、その書には欠くことができない文房具をあわせて展示しますので、どうぞお楽しみ下さい。

本阿弥光悦の手紙

8月27日(木)～9月23日(水・祝)会期中無休

前田育徳会
尊經閣文庫
分館

第3展示室

鴨居玲 -LOVE-

8月27日(木)~9月23日(水・祝)
会期中無休

サイコロに興ずる男達を描く「静止した刻」、地獄に堕ちた男達はい上がろうとあがく「蜘蛛の糸」、首吊りや廃兵、酔っぱらいが取り囲む中、呆然とキャンバスを前にする「1982年私」。いずれも劇的で、見る人によってはおどろおどろしい情念の世界が展開されます。その暗く重い絵をじっと見つめて、なかなか絵の前から立ち去りがたい様子を、時として展示室で拝見します。何かを考えざるを得ない、強い力が絵に秘められていることは間違いないのですが、それだけではなく、人に寄り添うやさしさが、鴨居の作品にはあると思えるのです。

一方若い裸婦を描いた「Étude (A)」や、男女が抱き合う「石の花」のような若干華やいた作品も鴨居は描きました。しかし、裸婦にまろやかな若肌を描かれることはなく、抱き合う恋人が足元から石化していく姿には、永遠の愛というよりは、分かり合えぬ男女の絶望を感じてしまいます。

ストリートな語り口で鴨居が語ることはないようです。醜の中に美を見、美の中に醜を見るので、鴨居のアイロニー(諧謔)というべきでしょう。

今回の特集は一見鴨居の絵とは縁遠い「LOVE」をテーマといたします。鴨居とLOVEといえば、一九八〇年の新境地を求めて、大阪日動画廊で開催した女性像や裸婦、恋人達を描いた「LOVE」展が思い出されますが、本特集はLOVEの姿を広くとらえて、鴨居の作品をセレクトしました。どうぞご覧ください。



鴨居玲 石の花

第2展示室

琳派の精華

—巨匠たちの競演—

8月27日(木)~9月23日(水・祝)
会期中無休

ご存知のように「琳派」という名称は、尾形光琳の名前に由来します。しかし琳派の様式は、光琳に先立つ本阿弥光悦や俵屋宗達らによって確立されました。彼らがまず目指したのは、法華宗徒として法華経が説く作善、すなわち金銀など善美を尽くした造形は功德となるとの教えを実践することでした。琳派が平安時代、特に末法思想を反映した十二世紀後半の王朝風美意識を復興したといわれるゆえんも、こうした法華信仰から理解することができそうです。そして琳派のもう一つの特徴は、能楽や茶の湯、連歌など室町時代から江戸時代にかけて発達した芸道との関わりです。それは一言でいえば趣向性です。俵屋宗達や尾形光琳の作品には、すべてを描ききらないある種の抽象性

を感じさせる作品が多く見られます。そこで、鑑賞者にはその深意を読み解くことが求められます。世阿弥は『風姿花伝』で「見る人のため、花ぞともしらでこそ、為手の花にはなるべけれ」と述べています。つまり鑑賞者が、ただ面白いとか綺麗だと感ずるその所に、深い作意を反映させようという作者の美学です。それゆえ琳派の親しみやすさや分かりやすさには要注意なのです。

今回は、光悦、宗達、光琳とその弟尾形乾山と、宗達の後継者としてその様式を光琳に伝えた俵屋宗雪、喜多川相説による書跡、絵画、陶芸、漆芸作品十一点(うち県指定文化財六件)を展示します。多ジャンルにわたる巨匠たちの競演を是非ご堪能ください。



県文 俵屋宗達 横繪図(部分)

久隅守景展

—加賀で開花した江戸の画家—

9月26日(土)～10月25日(日)

前号に続いて「久隅守景展」の主な見所を紹介します。

「田園画家」との異名の由来となった《四季耕作図》の優品を一堂に展示

久隅守景といえば、四季折々の人々の営みを農作業を軸に描いた《四季耕作図》を数多く制作したことで有名ですが、今回は伝統的な中国風俗から日本風俗に画風を転換する軌跡を優品八点でたどります。特に展覧会の第二室となる第八展示室では、常時屏風装の《四季耕作図》を六点展示するという、かつてない構成となります。是非ご期待ください。

新しい守景像の提示

狩野探幽という江戸時代初期の著名な画家の傑出した門人だったこと以外には余り知られていない久隅守景ですが、本展の開催をとおして作品や、わずかに残された伝承から守景の画業の、特に精神的背景に光を当てたいと思います。守景の画業は山水、花鳥、人物に及びます。それだけを見れば狩野派の門人に共通するものですが、守景の場合は個々の画題の意味を深く吟味して《四季耕作図》のような特別の思い入れをもって描いた作品に自在に展開しています。そして道教、儒教、仏教思想の融合としての自然との共生、足るを知る境地を、全くの自然体で描いた作品が《納涼図》といえます。後年「家貧なれどもその志高く、たやすく人の求めに應ずることなし」と伝えられた久隅守景の人となり、生き様は、深刻な環境問題に直面し大量生産・大量消費時代からの転換を迫られている現代にこそ、貴重な示唆を与えてくれるのではないのでしょうか。



久隅守景 山水図

参加者募集 第40回文化財現地見学

空間をたのしむ

—京都の庭園・障屏画を中心に

今年の現地見学旅行は、「空間芸術」をテーマに、庭園や障屏画、そして空間を特に意識してつくられた美術館を見学先に選びました。

じっくり、ゆっくり京都の文化財をたのしむ二日間としたいと考えております。

期 日／平成二十一年十月十七日(土)

～十八日(日) 一泊二日

定 員／四十四名

集 合／午前七時 金沢駅

(十八日午後七時に帰着の予定)

参加費／会 員 二四、〇〇〇円

会 員 外 二五、〇〇〇円

主な見学地／国宝 茶室待庵、大山崎町歴史資料館、大山崎山荘美術館、北村美術館四君子苑、他

◆申し込み方法

往復はがきに「文化財現地見学希望」と書き氏名・年齢・性別・郵便番号・ご住所・お電話番号・会員番号を記入の上ご応募ください。

◆応募先

〒九二〇一〇九六三

金沢市出羽町二一

石川県立美術館「文化財現地見学係」

◆応募締め切り

平成二十一年十月六日(火) 必着。

見学地の詳細などは次号に掲載いたします。

今回の話では、この展覧会を少しでも深く楽しんでいただくために、藝大美術館のコレクションの歴史を、多少は論理的に展開してみようかなと思っております。

私もこういう仕事を続けてきて、美術館あるいは博物館の根幹にあるものは、やはりコレクションではないかと思うべく思うようになってまいりました。コレクションがあつて、それをしっかりと管理し保存し展示し、さらには研究をして、また新たなコレクションを拡大していくというのが、ミュージアムであろうと思います。この語源は、ヘレニズム時代のアレクサンドリアにつくられた壮大な学術センター「MUSEION」ですね。学芸の女神たち「Musai」に捧げられた機関、それを語源とするのでしようけれど、そういう機関のなかにおいてコレクションというものは、非常に大事なものであつて、それがひとつの美術館の個性を決定していくものだと思います。

藝大美術館のコレクションは今、件数からいうと約二万八千件ほどございます。件数というのは一件一点ではありません。で、総数からいえばもっと多くなるわけですから、それらにはある意味、独特な成立過程を経ております。つまり東京美術学校、それから東京音楽学校を創設するための教育資料、研究資料としてコレクションの収集がはじまったということです。その中心的役割を果たしたのが、岡倉天心になります。明治政府が開国した後、最初はいわゆる欧化政策をとるわけですから、ウィーン万博などで、海外の評価が高いのは日本画・工芸品で

あるということがわかってきて、それからフェノロサらによって、日本の美術が見直されることになりました。天心は大変語学ができた人で、フェノロサの通訳などをしてしながら自分の眼を養っていたと思われませんが、日本の文化を見直そうという時期に、ちょうど東京美術学校設立準備室ともいえる図画取調掛が立ち上がります。そしてこの頃から美術学校開校のために、まずは日本の伝統的な美術の収集に当たったということになります。美術学校が開校してからは、それに加えて先生方に作品を制作させます。

勸業博覧会の出品のためとか、官民からの委嘱制作などを請け負いながら、先生方に大作を制作させて、それを資料として収集しています。あるいは、学生の初期の頃の教育に必要な手板などを、先生につくらせるといふ形をとっております。そして、美術学校が軌道に乗っていると、今度は学生の優秀作品、主として卒業制作（これは現在にまで続いておりますけれども）の、最初の頃はそのほとんどを収集して、それを次の学生への参考資料にしていきました。あるいは、美術学校のいつてみれば活動の記録、教育研究の記録にしていくという方針を立て、基本的には、この考え方が現在に至るまで継続されております。そういう意味では、この天心の理念はかなり長く、現在にまで続いているといつても過言ではありませぬ。残念ながら記録がはっきりと残っておりませんが、一番最初の受入が明治二十二年の時、三〇〇点以上のほとんどが岡倉天心主導で入ったものであろうと思われまふ。彼の眼によって選ん

だ教育研究資料としてのものが、現在では非常に大きな価値をもつてきているわけ、その内の最も重要な作品が今回ここに来ております《絵因果経》といえます。それから現在では、先生方に退任されるときにだいたい三点ぐらいずつ入れられてもつてます。また学生の卒業制作は、大正十三年までは、ほとんど全員入れていたんですが、とてもやはり無理ということ、現在では各科一点ないし二点の買上という形をもつて収集を続けております。

ある意味で初期の頃の方針が現在まで続いているわけですが、美術学校はその後、拡張政策が行われまして、いわゆる西洋画が創設されることになりました。フランス帰りの黒田清輝が先生として入つてまいりまして、天心の後に美術学校に大きな影響力をもつことになりました。黒田が入れた黒田以前のいわゆる旧派、脂派のコレクションというものは、日本の油彩画の第一世代のコレクションとして非常に重要な意味をもつてきているといえます。これも全部、教材としての収集ということですが、また黒田と久米桂一郎が、天心と違うことをやったのは、自画像の収集になります。自画像というジャンルは、西洋で油彩画が登場する頃に始められて、油彩画の歴史とともに発展してくるわけですが、それを学生に課したということはそのかなりの意味があつたことだと思ひます。現在に至るまで、一時期の中断はありますが、ずっと続いておりまして、十二号のPという同じ大きさで自画像という課題を課すと、やはりそれぞれ個性が出て、非常にもしろい

ものです。

美校騒動のあと、文部省から官僚が校長として派遣されてまいります。それが一九〇一年から一九三二年まで校長をつとめた正木直彦です。自ら工芸史の授業をもつたりするぐらい非常に勉強家で、かつ眼が利く人で、この正木の時代に随分またいろいろなものも収集されております。醍醐寺の《天部像》、鎌倉時代の《弥勒来迎図》や、藝大美術館の宝物の一つであります上村松園の《序の舞》など、非常にいいコレクションをつくっております。

藝大美術館は、基本的に個人のある作家を大量に所有するということはしませんが、例外的に平櫛田中の木彫のコレクションだけは、本人の寄贈として入っております。これは二つ理由がありまして、まず美校の彫刻が木彫から始まっていること。そして田中は、高村光雲、米原雲海つまり美校の最初の教授陣に習っている人なわけで、いつてみれば木彫の伝統を継ぐ人ということからです。

今回の展覧会は、藝大美術館コレクションのエッセンスを選び、かつコレクションの特色がある程度わかるように組み立てましたので、そういう目で見ただけだと、また少しはもしろさも増してくるかと思ひます。

〔近代日本美術の精華―東京藝大美術館コレクションを中心に―展にあわせて、五月十日に当館ホールで行われた講演会の内容を、当館の責任で要約したものです。〕

キッズ☆プログラム 参加者募集!

—小学生対象—

◆体験講座「きじっ子茶会」

昨年度ご好評頂いた、きじっ子茶会の二回目。今回は二席もうけ、風炉での茶会を楽しんでいただきます。茶会後は、そのまま茶室で本館所蔵の茶道具を間近でご鑑賞頂けます。

日時／十月四日(日) 第一席 十時〇〇分～

第二席 十三時三〇分～

会場／広坂別館 和室

参加費／親子で八〇〇円

定員／各席小学生とその親十組二十人

申し込み方法／往復はがき

締め切り／九月十五日(火)

往復はがきでのお申し込み方法

往信の宛名面

〒920-0963

金沢市出羽町2-1

石川県立美術館 普及課宛

往診欄の文面

・参加希望する講座名

・保護者・児童の氏名

・学年

・住所、電話番号

返信の宛名面

住所、お名前

返信の文面

何も書かないでください

*定員を上回った場合は抽選となります。結果は、返信はがきでご連絡いたします。

9月の行事予定

土曜講座	美術館 講義室	十三時三〇分～ 聴講無料
5日(土)	日本美術史13「近世染織・漆工」	南 俊英 学芸第一課長
12日(土)	日本美術史14「万国博覧会と工芸」	寺川和子 学芸主査
19日(土)	日本美術史15「昭和二年第八回帝展から現代まで」	南 俊英 学芸第一課長
ビデオ上映会	美術館 ホール	十三時三〇分～ 入場無料
13日(日)	名画の秘密シリーズ4 ヴィーナスの舞い降りた街(三〇分)	
講演会	美術館 ホール	十三時三〇分～ 聴講無料
6日(日)	加賀百万石の文化講座「本阿弥光悦と加賀藩前田家」	嶋崎 丞 館長
27日(日)	「夕顔棚納涼図」描かれた追憶の家族」	松嶋雅人氏(東京国立博物館特別展室長)

ミュージアムショップ通信



上から牛首袖のティッシュケース、小銭入れ、能登上布の裁縫セット、名刺入れ、印鑑ケース

ミュージアムショップでは県内の伝統工芸品を委託販売していることをご存知でしょうか。これからも少しずつご紹介していきたいと思いますが、今回、牛首袖の商品が並んでいましたが、それに麻織物の能登上布が加わりました。それぞれ県の無形文化財の指定をうけている伝統工芸品です。既製品にはない味わいを手にとってみてはいかがでしょうか。

企画展 Topics 「久隈守景展」 9月26日(土)～10月25日(日)



重文 加茂競馬図(部分)
大倉集古館蔵



重文 四季耕作図(部分)
京都国立博物館蔵



重文 四季耕作図(部分) 当館蔵



高岡市文 四季山水図(部分)
瑞龍寺蔵



鷹狩図(部分)
日東紡績株式会社蔵



業平図(部分)
松岡美術館蔵



都鳥図(部分)

次回の展覧会

会期：9月26日(土)～10月25日(日)

前田育徳会尊經閣文庫分館	第2展示室 (古美術)	第4展示室 (近現代純粹美術)	企画展示室
「絵画の展開～室町から江戸～」 —久隈守景の背景—	「狩野派の誕生」 —久隈守景の背景—	「動物彫刻」 —動物の造形と人—	「久隈守影展」 加賀で開花した江戸の画家
		第5展示室 (近現代工芸)	ご利用案内
		「九谷の色」	コレクション展観覧料 — 一般 350円(280円) 大学生 280円(220円) 高校生以下 無料 ※()内は団体料金 今月の開館時間 午前9:30～午後6:00 カフェ営業時間 午前10:00～午後7:00

—9月の休館日は24日(木)・25日(金)です—

石川県立美術館だより 第311号 〒920-0963 金沢市出羽町2番1号
2009年9月1日発行(毎月発行) Tel:076(231)7580 Fax:076(224)9550
URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>